

ワーグナー《ローエングリン》

Report 1

これがワーグナーなのだ

取材・文 中東生
Foto: Shinobu Nishi

ティールマン、復活祭音楽祭最後のプレミエ

4月9日、かろうじて雨が上がった冷気のなか、テレビ中継班らを脇に押しやりながら、ゴージャスな装いの観客たちがザルツブルク祝祭大劇場に吸い込まれていく。クリスティアン・ティールマンがザルツブルク復活祭音楽祭で振る最後のプレミエを見逃すわけにはいかない。ニコラウス・バッハラー現総裁の就任が決まった2018年、2024年まで決定していたプログラムとキヤスティングを白紙に戻すと発表した。そうして始ま

った争いに敗れたティールマンが、シュエターツカペレ・ドレスデンと共に当音楽祭を追い出される形となったのだ。

伝統と経験と自信に裏つけられた正統な演奏

《ローエングリン》とエルザ役のジャックリーン・ワーグナーはティールマン案が継承されたのだが、この日のティールマンは確かに、作曲家ワーグナーから脈々と続く正統なドイツ音楽を、当音楽祭創設者のヘルベルト・フォン・カラヤンのアシスタントも務めた正規の継承者として、伝統と経験と自信に裏つけられた不動の演奏で聴かせた。個人的には、別の指揮者のもとと繊細な音楽作りに心を震わせられたこともある。しかし、今宵の演奏には、「これがワーグナーなのだ」と万人を納得させるような圧倒的なパワーがあった。

そんな序曲をもっと集中して聴きたかったが、舞台上で展開するプロローグに気を取られてしまった。変装したエルザがこわばった表情でスヘルデ河から黒髪のかつらをすくい出す一部始終を目撃しているオルトルート。それらの意味を考えているうちに、話は進んでいく。ハインリヒ王のハンズパーター・ケーニツヒはドイツ語の明瞭さが光るが、がんば



テルムラントとローエングリンの決闘シーン ©Ruth Walz

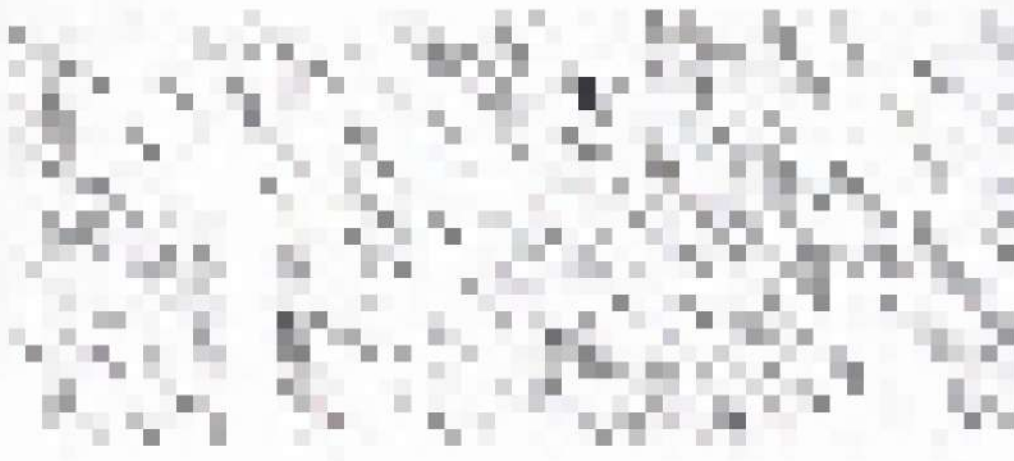
りすぎて声が割れた部分もあった。テルムラントのマルティン・ガントナーは一面的な悪役ではなく、変化する心情を上手く歌い、陰の立役者を担った。エレーナ・バンクラトヴァ演じるオルトルートもホルタメントを上手く使い、色気も感じさせる。ジャックリーン・ワーグナーは、伝統的エルザにはまだ声が軽いのが、自然で自由な歌い回しや弱声の美しさは、この現代版ローエングリンには必須だろう。でも純白を想像させる声で従来解釈のエルザもいつか歌わせたい。

ブーイングを浴びた演出

そう、このヨッシ・ヴィーラー、アンナ・ファイブロック、セルジオ・モラビトの演出チームは、エルザを弟殺しの犯人にしてしまったのだ。それなのになぜローエングリンが助けに来るのかは不可解だが、ヒッピーなイエスのような姿で



新婚のエルザとローエングリン ©Ruth Walz



登場したエリック・カッターは、失笑を買わないだけの歌唱力を有し、伸びる声を駆使して余裕な救世主を好演した。スリラー仕立てだという演出は確かにスリリングだったが、音楽的にしつくりこないのは当然だ。第1幕終了時からブーを叫んでいた観客が、カーテンコールでは合唱指揮者グループを演出組とまちが

えてブーイング攻撃を浴びせるハプニングもあった。

休憩のたびに大きくなるティールマンへの拍手からは、10年間築き上げてきた彼とシユタツカベレの音楽への賞賛と愛着があふれていた。彼らに「ヘルベルト・フォン・カラヤン賞」が贈られたのは、そんな観客をなだめるためだろうか。



ワグナー(左、エルザ)とカッター(右、ローエングリン) © PHILIP WILSON

